

## 土方巽・暗黒舞踏の受容と変容(2) 身体・言語・イメージ—野口体操との比較から

京都精華大学 三上 賀代

### 目的と方法

土方巽と野口体操創始者・野口三千三に直接面識はない。が、野口体操の舞踏グループへの影響は大きい。両師への師事体験を基に身体観と方法論の比較から身体と言語とイメージの関係を探る。

### 結果と考察

#### I. 身体へのアプローチの目的と言語

1. 人間の可能性の探求—イメージ、肉体の思考へ  
森羅万象にメタモルフォーズする肉体の可能性の発見による「人間概念の拡張」を根本理念とする土方舞踏と「体操による人間変革」を目指す野口体操は、肉体における人間の可能性を探求する。それは土方の「けつ頭」野口の「無脳の人」の造語に示される、頭脳優位の二元論的身体観から「イメージによる思考肉体による思考」に向かう。

#### 2. 身体感覚の実況放送としての造語

—原初音韻論遊びとカタリの身体感覚

言語で振付ける土方舞踏とイメージ体操と呼ばれ「言語の貧困は感覚の貧困」として言語感覚を磨くことをも体操とした野口体操において、師の言語は弟子たちの身体感覚を喚起し師の思考を理解させる手段であった。野口の「寝によろ」「ぶら上げ」「そへ」や土方の「間腐れ」「風だるま」他に現れるイメージ言語の造語は、稽古場での両者の身体感覚の実況放送の結果としての言語である。野口の「原初音韻論遊び」や甲骨文研究による語源字源の探求と、土方の呪術的「カタリ」の様相を呈する言語感覚は、肉体言語を提起する。

#### II. イメージによる身体観—身体意識の拡大

##### 1. 「風だるま」と「非意識主体説」

—「しばる」と「ほぐす」という方法

肉体の思考を探求する両者は身体の意識的コントロールを問う。死後の焼かれるのが身を見つめる土方の「風だるま」の話は肉体と意識の距離つまり舞踏家の身体意識を指す。イメージ言語と物理的拘束による土方の「しばる」という方法と、「非意識主体説」を唱導する野口の、重さに委ねる快感を手がかりに「ほぐす」対極の方法は、意識主体の身体観運動観を超えた身体意識を目指す。

##### 2. 「衰弱体」と「原初生命体」

—刻々の変貌を遂げる主客未分の身体意識へ

生死、自他、内外の境界がない未分化なひとつの全体としての「原初生命体」的あり方と、運命と重力の全受容としての「衰弱体」は、「風だるま」「非意識主体説」をも超えた主客未分の身体意識状態を示す。宇宙の星雲や受精卵の「原初生命体」と、衰え消えていく「衰弱体」という対極のイメージは刻々の変貌を遂げる身体と身体意識

である。

こうした身体が土方の「なる身体」であり、野口理念における重力下の今ここに在る絶対的かたちとして、刻々の時間の断面をうつす身体である。

### III. イメージによる運動観

—身体内部感覚としての時空間と力性

#### 1. 「灰柱」と「水の入った皮袋」

—「崩れ」のダイナミズムとしての重さと時間

粒子に還元された肉体が極小のバランスで立つ土方の「灰柱」と、重さが主たるエネルギーとなることを知覚しやすい野口の「水の入った皮袋」という身体イメージは、バランスとアンバランスの中に成立する運動に、「崩れ」の観点を打ち出す。「崩れ」のダイナミズムは、身体内部感覚としての運動観に時間プロセスを持ち込み易くする。

#### 2. 「内触覚・外触覚」と「体性深部感覚」

—皮膚境界と空間

土方が最終呈示した無限に引き裂かれる「内触覚」と「外触覚」の身体知覚は、皮膚境界の希薄化による身体内外の空間の逆転から身体意識の変容を図るものである。これは、皮膚を総合的感覚受容器であり脳・神経の原初形態と捉え、内触覚としての「体性の深部感覚」や内臓感覚を身体知覚の基礎に置く野口の方法論の延長にある。

### IV. イメージによる人間観—いのちの根源へ

#### 1. 動きのモデルと肉体の記憶

「なる身体」の対象となる森羅万象は、「自然直伝」をうたう野口体操における動きのモデルである。さらに「死者を舞踏教師」とする土方の舞踏観の根底にある「からだに沁み込んだもの」としての肉体の記憶のスケールは、岩石鉱物を地球型生命体の祖先と考える野口の人間観につながる。

#### 2. 胎児と蛆虫から

日本文化の原理のひとつを半透明と考え、胎児を半透明の蛆虫と見る野口の文化観と生命観は、初期作品に種子や胎児を提示し、光と闇のあわいに日本文化を探る土方に重なる。生命のちからの根源の原初モデルに蛆虫と胎児を置く土方と野口は、発動するいのちの在り様を探求したと考える。

### V. まとめ

「イメージと呼んでいるものこそ、意識の実体、・・イメージによるしか動きようがないのが人間」という仮説の下、イメージの実感に基づく思考による運動観、身体観、人間観、言語観、美意識を探る方法論を明示した野口体操は、「技術のないイメージはあぶない。イメージのない技術はさびしい」とイメージと技術の関係から身体を問うた土方舞踏に重なる故に舞踏家に受容された。(京都精華大学創造研究所助成研究)

#### 参考・引用文献

三上賀代「からだへのまなざし—ほぐす、ふれる、であう、から舞踏へ」『からだ』を生きる—身体・感覚・動きをひらく5つの提案—創文企画 2001